

アラミス編

事件解決から八ヶ月後。

銃士隊の活躍で学園を騒がせていた悪魔騒動は一件落着いた。

そして、呪いを解かれ人間に戻った銃士隊は、生徒を守った英雄として讃えられ、それまで通りの学園生活を送った。

——アトスとアラミスが卒業した最初の夏。

——舞台の稽古場。

アラミス (ねえ、ダルタニアンさん。

今度の舞台で初めて名前のある役をもらったんだよ。

この僕が俳優を目指すなんて、ちょっと笑えるでしょう？

少ししか出来ないけどさ、こんなに嬉しいなんて思わなかったな。

今日は舞台稽古のあとボイストレーニングに行くんだ。

汗水流してって苦労人エピソードを語るつもりはないけど

努力しないと何事も上達しないからね。剣と同じさ。

僕は僕なりのやり方で勝負していくつもり。

仕事もレッスンも予定通り終わらせて、きみに会いに行くよ)

監督

「アラミスー！」

アラミス

「あ、はい。」

——主人公の部屋。

——パラリ。

ダルタニアン (ふふっ、アラミスさんも頑張ってるんだな……)

やっと明日から夏休み。

アラミスさんに会える……！)

——パサツ……

手紙

『早くダルタニアンさんに会いたいな。待ち遠しいよ。

僕はね、毎日きみのことを想ってる。

夜、眠る前にきみの笑顔を思い浮かべ

朝、目が覚めたらきみの名前を付けた花に『おはよう』と言って水を遣る。

花は一輪だけ。この僕が部屋に一輪しか飾ってないんだ。  
花に囲まれた学園生活を思い出せば嘘みたいだと思わない？  
でもね、もう僕の花はきみしかいないんだよ。分かってるよね？  
さあ、早くおいで、僕のレディ。  
会った瞬間、きみをこの腕で抱きしめる。

きみの恋人アラミスより』

ダルタニアン (ふふっ、相変わらず何枚も書いてくれてる。

嬉しいな……)

……アラミスさんとの手紙、

こんなにいっぱい……ボックスから溢れそう)

ダルタニアン 「……それにしてもアラミスさん、筆マメだな。」

——翌日。

——砂浜の待ち合わせ場所。

ダルタニアン 「えーっと……ここで待ち合わせしたんだけど……

あっ……！」

アラミス 「手紙に書いておいたでしょう？」

会った瞬間、抱きしめるって。」

ダルタニアン 「……もう。びっくりしました。

あ、サングラスかけてる……！」

アラミス 「一応、変装のつもり。」

ダルタニアン 「……それだけじゃすぐバレると思いますよ。」

アラミス 「ふふっ、そっかもね。」

女の子の声 「きゃー！ アラミス様よー！」

アラミス 「ダルタニアンさん、走るよ。いい？」

ダルタニアン 「あ、はい……！」

ダルタニアン (走ってシュバリエ島を出た。

途中から歩いたけど……ずっと手をつないでいた。

……冬休みのあのときのように……)

笑いながら……)

——アラミスの別荘。

アラミス 「……ふう、今日は暑いね。」

ダルタニアン 「……それで別荘に着いた早々、  
プールなんですね？」

アラミス 「そう。」

まあ、リラクゼーションの目的もあるけど  
最大の理由は……」

ダルタニアン 「あっ……」

アラミス 「こつやって水の中で仲良くすること。」

ダルタニアン 「ちよっ……」

アラミスさん、くすぐりたいです……!!」

アラミス 「ふっ……、あははは！」

ダルタニアン 「もう……!!」

ダルタニアン (アラミスさんが子供みたいに笑ってる……)

……なんだか幸せだな……

アラミスさんの腕に包まれて、

少し振り返るとアラミスさんの優しい目に安心する。

………ただ、ちよつと気になるのは……)

アラミス 「ねえ、どうしてさっきから背中を向けたり  
目を逸らしたりするの？」

ダルタニアン 「え……  
だって……」

ダルタニアン (裸に見えるなんて言えない。  
そのゴールドの水着姿が……)

アラミス 「久しぶりに会ったから恥ずかしいんだね？  
いっよ。」

そういう照れたダルタニアンさんも可愛いから。」

ダルタニアン 「……………」

あ、そういえばアラミスさん、  
ポルトスが前に言ってましたよ。

『オレもアラミスの別荘に行きたい』って。」

アラミス 「ああ、きみの手紙にも前に書いてあったね。」

ダルタニアン 「はい。」

アラミス 「でも、ダメ。」

ダルタニアン 「えっ?」

アラミス 「ポルトスがここに来たら

きみとの時間を邪魔されるからね。

それに、本当に来たいなら自分から手紙を書けばいい。  
字が書けないわけじゃないんだから。」

アラミス 「…………あれ? 書けないんだっけ?」

ダルタニアン 「…………あの、ちょっと

黒いアラミスさんになってますよ。」

アラミス 「ふふっ、そう?」

じゃあ、黒いついでに……

…………もう少し強く抱きしめてもいい?」

ダルタニアン 「あっ…………」

アラミス 「……………」

ダルタニアン 「…………アラミスさんのまつ毛が頬に感じる……

まばたきをする度に動いて……

…………ちよつと恥ずかしい…………」

アラミス 「ねえ、ダルタニアンさん。」

ダルタニアン 「はい。」

アラミス 「ざっきのは嘘。

明日、アトスとポルトスがここに来るよ。」

ダルタニアン 「明日……」

えっ!? 明日ですか?」

アラミス

「実は招待しておいたんだ。  
久しぶりに会いたくなってね。」

ダルタニアン 「わあ……!」

アラミス

「元銃士隊と現銃士隊のパーティってところかな。  
朝まで盛大に楽しもう。」

ダルタニアン

「アラミスさん……  
黒いアラミスさんって言うてごめんなさい。」

アラミス

「いいんだよ。  
……それよりさっきさ。  
ポルトスの言葉だけど

『オレもアラミスの別荘に行きたい』って言ったでしょう?  
きみにアラミスって呼ばれて「瞬ドキッとした。  
………ねえ、もっと呼んで。」

ダルタニアン 「え……」

アラミス 「ダルタニアン。」

アラミス

「もう『さん』付けは要らないですよ。  
恋人同士なんだから。」

ダルタニアン 「……………」

アラミス 「ねえ、呼んでよ。」

ダルタニアン 「……アラミス。」

アラミス 「何? ダルタニアン。」

ダルタニアン 「……………」

アラミス 「ダルタニアン……」

大好きだよ、ダルタニアン……」

ダルタニアン (夕日が傾いてきた……………)

こんなシチュエーションで  
アラミスさんに何度も名前を囁かれたら……  
もっともっと、アラミスさんのことを好きになってしまう)

アラミス 「ねえ、ダルタニアン。

アトスとポルトスに僕たちのラブラブぶりを見せてやろう。  
それに、泊めるのは一泊だけ。  
連泊したいなら自分たちで宿を探してもらおうつもりさ。  
ふふっ。」

ダルタニアン 「……もう。

優しいんだか意地悪なんだか。」

アラミス 「……明日はあの二人が来るけど

今夜と明後日以降は僕たち二人きりだ。  
……だから……  
もういいって言うくらい愛してもいい?」

ダルタニアン 「……………」

アラミス 「いいよね? ダルタニアン。」

ダルタニアン (返事ができません……………!)

アラミス編おわり